

ミステリ読書案内

2024. 1. 27 発行元

第547号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

東野圭吾「あなたが誰かを殺した」

今年の『このミステリーがすごい!』年間ランキングの第3位となった東野圭吾の『あなたが誰かを殺した』を取り上げる。『捜査一課・加賀恭一郎シリーズ』の作品は「本格もの」としての完成度が高い。

「加賀恭一郎シリーズ」

『加賀恭一郎シリーズ』は右上の表に示した通りで、本作は12作目になる。ただ題名のつけ方から言うと『どちらかが彼女を殺した』『私が彼を殺した』に続く3作目の形になっている。この題名は、作品内容が「謎解き」を中心に構成されていることを示している。

本作も「本格もの」の王道をしっかりと踏まえた展開である。表紙を開くと、最初にカラー挿絵が載っていて、関係する別荘の配置が一目でわかるようになってきている。「本格謎解きミステリ」好きの興味が掻き立てられるというものだ。

事件は最初の44ページで完了

事件は夏の別荘地で発生。4つの家族・関係者が集まって恒例のバーベキュー・パーティを開く。午後十時頃に解散したのだが、その後に連続殺人事件になる。事件の経過が説明されるのは44ページまで。その後は、ずっと各人の証言から動きを分析していく流れ。

その意味では「謎解き」に十分な時間をかけていることになる。44ページまででは登場人物の名前と立ち位置の結び付きが混乱しかけていた読者も、ここからは細かく段階を踏んで解説されるので、頭の中が整理されていくことになる。

警察の手ではなかなか捜査が進まなかった部分を、関係者が一堂に会する「話し合い」で一步一步解明されていく過程が特に読者を惹きつける。加賀が話し合いの進行・まとめ役を勤めていることも効果的である。「警察小説」の形ではない古典的なミステリの手法で楽しませてくれる。こういうところは東野圭吾の上手さだと感じる。

手掛かりと結末への流れ…

「犯人当て」のゼミ本として使えるだろうか？ 毎年「犯人当て」の会に参加している者としては気になるところだ。答えは「使える」。でも、難しそうな気もする。かなり捻ってあるから…。「問題編」をどこまでにするのかも迷う。何を当ててもらおうかを考えて区切らなけれ

東野圭吾・加賀恭一郎シリーズ

1. 卒業 雪月花殺人ゲーム
2. 眠りの森
3. どちらかが彼女を殺した
4. 悪意
5. 私が彼を殺した
6. 嘘をもうひとつだけ
7. 赤い指
8. 新参者
9. 麒麟の翼
10. 祈りの幕が下りる時
11. 希望の糸
12. あなたが誰かを殺した

ばならない…。さて、いつもOB会に参加しているの仲間は本書を読んだのだろうか。東野圭吾作品なので誰かは読んでいそうな気もするけれども…。

一番最後の章は必要か？

一番最後に十数ページの最後の章がついている。その前が白ページで大きく開いている関係で、この章がなくてもよいのでは…と思ったりもした。この最後の章がついているのが東野圭吾らしさであり、「意表を突く」結末ということになるのだろうか、なければいけないでもない問題ないような気がする。少し不自然さは残るにしても。東野圭吾作品の読後の「後味の良さ・悪さ」に結び付く部分でもある。気にしない人はまったく気にならないだろうが…。

柘サナカ 「一駅一話！山手線全30駅のショートミステリー」

11月に宝島社文庫から出た本。帯には「笑いあり、涙あり、感動あり！3分で楽しめる一駅間の超短編集」と書いてある。私はショート(ミニ)ミステリは大好きだ。集中力が高まるせいか、読んでいる時に勢いがついてしまい、一冊一気に読んでしまう。読みやすさ、わかりやすさが勝負なのかもしれない。本書は「山手線」がテーマである。全30駅を取り上げるところが素晴らしい。よほどの思い付きが続かなければ完成できない作品とも言える。(中には必ずしもその駅でなくてはならないわけではない設定の作品もあるが…)

第一話は大崎駅で『通勤電車の流儀』。四月。小学校一年生らしき男の子を連れた母親。まだ習っていないはずの九九を暗唱させ、途中で詰まってしまうと母親の罵声が響く。これができないと「ろくな大人になれない」「平社員のまま終わってしまう」と叫ぶ。周りの乗客は耳をふさぎたくなるのだが、なんとか男の子を助けようと皆で協力して…。新駅・高輪ゲートウェイ駅。駅名が公募では130位だったのに採用された。売れない作家、もう戦力外通告されたような作家が…。いろんなところに着想の起点があるのだなあと思わせられる。最終話は三十一番目の「幻の駅」。山手線にかつてたった二日間だけ使用された駅があるという…。